

本研究の目的は、コロナ禍によって激変をこうむっているインド映画において、その変化の遠因をコロナ以前の文化伝統に求め、比較文化論、社会人類学など多面的な観点からそれらの解明を試みるころにあった。研究代表者（赤井）と研究協力者（杉本）はそれぞれの専門研究の立場から、近代タミル社会における映画の政治的役割、先行する舞踏伝統がどのように変質を遂げて映画の重要なコンポーネントとなったかを、主に先行研究を分析することで総括し、これを相互批評の対象とするだけでなく、随時ゲストとして招聘した隣接研究者や専門家（この場合は本邦でインド映画上映に携わっている複数の関係者）からの意見を得つつ、研究の学際性を確保することを心がけた。

具体的には、以下のように都合7回の研究会を開催し研究成果を発表した（外部招聘者の発表を含む）。

第0回（5月30日）

メンバー顔合わせ、研究計画

第1回（6月6日）

デーヴァダーシをめぐる新資料（赤井）

MGR以降のタミル映画（杉本）

第2回（7月4日）

インド映画史におけるパルケーの占める位置（杉本）

第3回（8月4日）

インド映画とストーリーミング配信に関する新研究（赤井）

シンガポールにおけるバラタナーティヤムの伝播発展とインド映画の影響（竹内嘉晃）

第4回（9月26日）

イエランマ崇拜と北カルナータカのデーヴァダーシ（赤井）

コロナ禍の日本におけるインド映画の公開・興行（相原理歩）

第5回（11月14日）

インド映画と検閲#1 植民地時代から独立へ、何が受け継がれたか（赤井）

第6回（2月27日）

インド映画と検閲#2 検閲制度とその必要性（赤井）

研究発表では赤井、杉本のみならず、研究の過程で発生した問題点に関し、専門家の意見を聞くというかたちで2回、外部から発表者を招聘した。第3回に国立民族学博物館研究員の竹内嘉晃を招き、バラタナーティヤムに代表される古典舞踊が国外印僑社会で民族アイデンティティを保持するためにどのような役割を果たしているか、またその古典舞踊の習得の過程でフィルミー・ダンスと呼ばれる映画音楽の舞踏がどのような影響を与えているかを、シンガポールのタミル人社会を事例にして説明を受けた。また第4回では印度映画広報委員会の相原理歩を招き、日本公開されるインド映画のラインナップがコロナ禍によってどのような影響を受け、市場の縮小を余儀なくされたかに関して説明を受けた。

研究会を通じて研究代表者の赤井は次の2点をめぐって研究成果を発表した。ひとつは映画音楽の舞踏の先行形態とされる古典舞踊バラタナーティヤムに専従したデーヴァダーシと呼ばれる特殊な集団に関するものである。これは南インド社会が近代化する過程で「古典化」されたもので、国民芸術としてふさわしくない側面、すなわち神殿売淫としての機能は徹底的に否定もしくは無視されたものだが、地方によっては今なお儀礼と関連した風習として残存していることを、自身の調査も踏まえて先行研究を概括して報告した。二つ目はインド映画に関する検閲制度についての分析で、垂直統合が未熟なインド映画界では、検閲＝事前審査はむしろ健全な資金注入を担保するものとして好ましい制度であり、映画制作者側から制度の法的強化を要請されていたものであるにもかかわらず、検閲制度そのものが政治化して政権与党のプロパガンダに利用されることが多いため、その希望が却けられていることを公告した。また杉本は、インド映画の父と呼ばれるダーダサヒブ・パルケーの事績に関して、パルケー全盛期の独立を目指すインドの政治状況、ことにマラーティ民族主義の観点から再評価する発表を行ったが、これは前年から続く映画の政治的側面に関する分析の一環である。